

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

NGO活動が宗教の壁を越える：  
タイ、パキスタン、日本における支援の現場から：  
共同研究：NGO活動の現場に関する人類学的研究：  
グローバル支援の時代における新たな関係性への視座（2011-2014）

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 信田, 敏宏 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/5523">http://hdl.handle.net/10502/5523</a>

# NGO 活動が宗教の壁を越える —タイ、パキスタン、日本における支援の現場から

文  
信田敏宏

共同研究 ● NGO 活動の現場に関する人類学的研究  
—グローバル支援の時代における新たな関係性への視座 (2011-2014)

## はじめに

NGO 活動の現場における人びとの新たな関係性やグローバルに展開されている支援活動のメカニズムの解明を目的とした本共同研究は、2011年10月にスタートし、これまでに4回の研究会を実施してきた。本稿では、特に第2回、第3回の研究会でのメンバーの発表内容を紹介することに重点を置きながら、共同研究の進捗状況を報告してみたい。

## 「グローバル支援」とは何か

2011年12月18日に行なわれた第1回の研究会では、研究代表者である信田が共同研究の概要について報告した。その後の質疑応答では、グローバル支援やNGOと人類学の関係性などについて議論が交わされた。

そして、参加者がそれぞれ研究内容や本共同研究への抱負について、長めの自己紹介を行なった。加藤剛（総合地球環境学研究所）からは、ヨーロッパ起源の「支援」や「ボランティア」と今日の「グローバル支援」がどのように関係しているのか、「グローバル支援」と開発援助の違いは何か、人権や環境保全などのグローバルな価値の広がりやNGOなどの市民社会のアクターにどのような影響を与えているのかなど、「グローバル支援」とは何かについて世界史的な視点からいくつかの問いが今後の課題として示された。

## 津波被災をめぐる NGO 活動

2012年3月9日に開催された第2回の研究会では、小河久志（当時は京都文教大学、現在は大阪大学に所属）が、「NGOの支援活動と社会変化—タイ南部インド洋津波被災地の事例」と題した研究発表を行なった。2004年12月に起きたスマトラ沖地震により、小河の調査地であるタイ南部トラン県にも大津波が押し寄せた。住民と共に、自らも命からがら避難した経験を持つ小河の報告は、説得力のあるものだった。それまで人類学的調査を行っていた小河は、津波被災地となった調査村でのフィールドワークを継続しながら、津波被災を契機にした住民の宗教意識の変化や地域社会の変容を自らの研究テーマに取り込んでいった。

今回の発表は、津波被災をめぐるNGO活動に焦点を当てたものであった。小河は、調査村の事例を中心に、NGOの支援活動や、その活動が被災地住民の日常生活に及ぼした影響などの点について詳細に報告した。

同地に関与したのは、キリスト教系NGOであるワールド・ビジョン（World Vision）とイスラーム系NGO／イスラーム復興運



タイ南部トラン県のインド洋津波被災地でワールド・ビジョンが行なった援助物資支給の様子。この被災地では津波直後からNGOが精力的に支援活動を行なった（2006年3月、小河久志撮影）。

動団体であるタブリーグ（Tablighi Jama'at）であった。支援の遅れや不正、被災者のニーズとのズレが目立つ政府による復興支援とは対照的に、NGOによる支援活動、特にワールド・ビジョンによる支援活動は、迅速で不正も少なく、被災者のニーズに合ったものであった。また、イスラームの教えを説くタブリーグによる支援活動も、精神面から村びとをサポートするものであった。

こうしたNGOの支援活動について、小河は、津波前と津波後の村びとの対応の変化やNGOの影響力の変化に注目し、考察を進めた。津波前、村びとは、キリスト教系であることを理由にワールド・ビジョンの活動を拒否していたが、津波後は、大多数の村びとが受け入れるようになった。また、津波前はNGO活動の影響は限定的であったが、津波後は政治・経済・宗教など多方面にわたり影響を及ぼすようになった。こうしたことから、津波を契機にして、人びとの関係性に変化が生じ、NGOの存在感が高まってきたと指摘した。

質疑応答・ディスカッションでは、特に、キリスト教系NGOとイスラーム系NGOの違いに注目が集まり、仏教系NGOの場合はどうなのかなど、宗教がNGO活動に与える影響やそれぞれの宗教が支援活動に対してどのような考え方をしているのかなどについて熱心な議論が行なわれた。

## 地続きの国際協力を求めて

2012年6月16日に開催された第3回の研究会では、子島進（東洋大学）による発表「国際協力を地続きのものとする理念と



ワールド・ビジョンの支援を受けてお菓子の販売を始めた女性。この仕事はインド洋津波で夫を失った彼女の貴重な収入源となっている（2006年7月、タイ、トラン県、小河久志撮影）。



アルカイール・アカデミーの外観。国内外の支援を受けて、次第に規模が大きくなってきた。現在では2500人の生徒たちが学んでいる（2011年1月、パキスタン、カラチ、子島進撮影）。

実践——JFSA 西村光夫さんの事例から」を中心にディスカッションを行なった。

子島は、2005年以來、「地に足をつけて行なう国際協力」として、学生たちとフェアトレード商品を販売する活動を続けている。試行錯誤を続けるなか、国内と国外の往還、両者を地続きのものとするアイデアと実践例を痛切に求めるようになったという。子島は、ふとした縁で知り合ったJFSA（Japan Fiber Solidarity Association: 日本ファイバーリサイクル連帯協議会）と代表である西村光夫さんに関心を持つようになり、日本やパキスタンでのJFSAの支援活動への参与観察や西村光夫さんへのインタビューを繰り返して行なうようになっていった。子島は、JFSAの活動は「日本＝先進国から発展途上国に援助に行く」という国際協力のステレオタイプから脱却するためのヒントを与えてくれると感じている。

そのJFSAは、1995年以來、日本で集めた古着を販売することで、パキスタンのアルカイール・アカデミーを支援する国際協力NGOである。アルカイール（「福祉」という意味）・アカデミーは、カラチのスラムを中心に5つの学校を運営し、スラムに暮らす子供たちへの教育支援を行ったり、大洪水被災地の農民たちと共にフェアトレードを行なう団体である。

子島は、西村さんが、東京の山谷での「越冬」や近所の子供たちのための「寺子屋」の創設など、様々な経験を経て、リサイクルセンターを開店し、そこで日本に出稼ぎに来ていたパキスタン労働者と出会い、パキスタンでの支援活動を行なうようになった経緯について報告した。また、JFSAの組織や活動の理念などについても、参与観察やインタビューを基に、給料が同額といった民主的な組織運営の実態やJFSAの理念



学校内に作られた作業場で、エプロンを縫製する女性たちと西村さん（一番左）。生協を通して、日本でフェアトレード商品として販売する計画が進められている（2011年1月、パキスタン、カラチ、子島進撮影）。

が生活協同組合のワーカーズ・コレクティブ（働く者が共同で出資し、対等に働く労働者協同組合）の理念に近いことなどを明らかにした。人と人とのつながりを重視し、地域のなかで積極的にマージナルなグループと関わる姿勢が、JFSAの特色であることも強調した。

子島は、古着の販売をめぐるJFSAと他の

協力団体とのネットワークについても触れ、理念や活動内容が異なる団体がJFSAを中心に結びついている様子を明らかにした。古着回収には、主に生協関係の団体が協力しているのに対して、古着の選別作業には、ひきこもりの社会復帰支援や障害者の自立支援、薬物依存者のリハビリなどの活動を行なう団体が協力しているのである。そして、JFSAが結びつこう古着販売の活動は、さらに、パキスタンのスラムでの教育支援やフェアトレード活動へとつながっている。つまり、JFSAが橋渡し役を担うことによって、生協活動に関わる日本の女性たちとカラチのスラムに暮らす子供たちは、間接的につながっているの

である。JFSAの財政は、生協に関わる女性たちがたゆまず古着を集めてくれるおかげで成り立っているのだと、子島は力説する。

報告の最後に、子島は、こうしたJFSAの理念とネットワークの作り方に、「グローバル支援の時代における新たな関係性」についての大きなヒントがあることを示唆した。

質疑応答とディスカッションでは、パキスタンの支援活動におけるイスラーム的な考え方の影響や、西村さんのライフヒストリー、日本における生協の歴史、双方向的な支援のあり方などについて、様々な質問やコメントが出され、議論が沸騰した。

#### おわりに

小河と子島の報告は、「宗教（特にイスラーム）と支援」をテーマに企画したものであったが、そうした企画を上回る充実した内容であった。また、いずれの研究会でも、支援者と被支援者の関係性や、遠くに住む見知らぬ人びとを支援しようと



カラチ最大のゴミ捨て場であるカチュラ・グンディーにある学校でも、生徒たちは真剣に学んでいる（2011年1月、子島進撮影）。

する根本的な理由や動機とは何なのかなど、多岐にわたって自由な議論が交わされ、本共同研究の目的に沿った知見や成果が得られた。

今回は、紙幅の関係から、第3回の研究会までの報告に終わってしまったが、次回は、「グローバル支援」について集中的に討議した第4回の研究会について報告したいと考えている。

#### のぶた としひろ

民族文化研究部准教授。専門は社会人類学、東南アジア研究。開発、イスラーム化、エスニシティなどをテーマに、マレーシア先住民オラン・アスリを対象とした研究を行なっているが、最近では、NGO活動とコミュニティとの影響関係に関心を持ち、研究を進めている。著書に『周縁を生きる人びと——オラン・アスリの開発とイスラーム化』（京都大学学術出版会2004年）、共編著に『東南アジア・南アジア 開発の人類学』（明石書店2009年）など。